



ガーシュイン (1898～1937)
photo by Ninian

ジャズの往来 ～ガーシュインとパリ

小沼純一

変化の時代

ジョージ・ガーシュインがこの世に生をうけたのは、19世紀の終わりにかけている、いやむしろ、20世紀の磁力が19世紀を引き寄せているような1898年でした。2歳年上の兄、のちに作詞家として大成するアイラがいまひとつ興味が薄かったピアノにジョージ少年は熱心にとりくみ、みるみるうちに上達、十代のうちから出版社の店先でミュージカルのナンバーを歌いながらピアノを弾き、日々の糧を得るようになります。アメリカ合衆国はニューヨーク、ブロードウェイでのことです。

海のむこう、ヨーロッパでは音楽が変わりつつありました。長調・短調の

調性が揺らぎ、明確な終止形（カデンツ／カダンス）は不安定に揺れ動くデカダンスへと移り、和音は複雑になってきます。カトリック教会で歌われていたグレゴリオ聖歌がもとづく教会旋法が長短調と並存するようにもなります。ガーシュインが音楽の世界に足を踏み入れたとき、ドビュッシーやラヴェルは時代の最先端にいました。そう、〈牧神の午後への前奏曲〉はガーシュインの生まれる4年前、ラヴェルの〈亡き王女のためのパヴァーヌ〉は、生まれてから1年後の作品です。

パリ、世紀の境

パリは芸術の都として知られていま

した。ひとつの色だけに染まっているのではなく、多彩な色がつねに塗り重ねられ、変化し、層をなしている。クラシック音楽、オペラやバレエ、コンサートやサロンの音楽があり、ミュージック・ホールや文学カフェ、街角のうた、見世物小屋などなど、さまざまな場所に音楽がありました。19世紀末から20世紀はじめといえば、万国博覧会の影響も大きいでしょう。エッフェル塔が建造された1889年の博覧会で、若いドビュッシーやサティが非ヨーロッパ圏の文化にふれ、つよく影響を受けます。1900年の博覧会では行進曲で有名なジョン・フィリップ・スーザが、吹奏楽団を率いてシャンゼリゼ大通りで演奏を披露、ジャズの前身ともいえるラグタイム、ケークウォーク、フォックス・トロットがこのとき紹介されたといえます。ドビュッシーの〈ゴリウォーグのケークウォーク〉や〈ミンストレル〉といったピアノ曲にはこうした背景があるのです。これらの曲が収められた曲集はそれぞれ、



1889年、万国博覧会が開催された頃のパリ

前者〈子どもの領分〉が1908年、後者〈前奏曲集第1巻〉が1910年ですから、ガーシュインの少年時代にあたってもいます。

こんなことも想起しておいていいかもしれません。リズムをきざむ打楽器が、19世紀ロマン派とは比較にならないほど豊かになりました。ダンスもあります。19世紀から20世紀にかけての大きな変化は、耳とアタマで音楽を鑑賞することからの解放でした。ロシアの興行師、ディアギレフ率いるバレエ・リュスが西ヨーロッパに来て、ストラヴィンスキーの〈火の鳥〉〈ペトルーシュカ〉〈春の祭典〉を舞台に。これは大きな衝撃でした。あらためて強調するまでもないでしょうけれど、今月の《マチネーシリーズ》で演奏される〈牧神の午後への前奏曲〉も〈ダフニスとクロエ〉も、バレエ・リュスによって舞台化されています。また、ステージの上ではありませんけれど、^{ちまた}ではアルゼンチンからタンゴが届いていました。

ドビュッシーやラヴェル、さらには六人組といった作曲家たちが活躍する第一次世界大戦前後のパリは、音楽の語法の自由さ、リズムと結びついた身体の発見と復権が、音楽家のみならず、ダンサーや美術家、文学者から一般大衆まで巻きこんで、おこっていたのです。

フランスに届くジャズ

ドビュッシーは第一次世界大戦が終わりつつあった頃、1918年にフランスを憂いながら病いに苛まれ、世を去ります。

アンドレ・シェフネルは、世界ではじめてジャズの研究を世に問うた『始原のジャズ』（1926）で、フランスにジャズがやってきたのは1918年、カジノ・ド・パリに輸入されたと記しています。ですから、ドビュッシーとアメリカの混血音楽とはぎりぎりのところですれちがってしまいました。逆にこの時期、もっと年下の作曲家はジャズへの関心をしばしばクローズアップしてきます。サティ〈パレード〉（1917）、ストラヴィンスキー〈兵士の物語〉（1918）や〈ピアノ・ラグ・ミュージック〉（1919）、オーリック〈アデュー・ニューヨーク〉（1920）、ミヨー〈世界の創造〉（1923）など、曲の一部のなかでも、それとわかるリズムがあらわれる作品ばかりです。

ここにガーシュインを交差させてみましょう。音楽出版社が軒をならべたニューヨークの「ティン・パン・アレイ」——あちこちでピアノが、歌声がひびき、文字どおり鍋や釜を叩いているようだったから——と呼ばれた界限でピアノを弾いていた若き作曲家は、〈ス

ワニー〉でその名を広めることになりました。1919年です。ジャズ、と呼ぶにはちょっとばかりはばか



〈スワニー〉の楽譜の表紙

ず。ポピュラー・ソングです。でも、ヨーロッパにアメリカの混血音楽が届き、それがさらにクラシック系の作曲家にインスピレーションを与えている、新しいイディオムとして用いられている、そういう時代にガーシュインも作曲を、やり方は違ったかもしれないけれど、ひとつの楽曲を構成（コンポーズ）する意志をもって音楽にとりくんでいた。そのことが確認できるのではないのでしょうか。

ジャズ、二都物語

〈ラブソディ・イン・ブルー〉のニューヨーク初演は1924年です。3年後の1927年、ガーシュインはヨーロッパへ旅行します。そのとき敬愛するラヴェルと会見し、師事したいとの希望を述べます。すでに一流のガーシュインなのに、わざわざ二流のラヴェルになる必要はないよ。50歳をすぎた小柄な作曲家がこう返したエピソードは

よく知られているでしょう。ガーシュインが弟子入りを申しでるのは出来過ぎだとおもわないではありませんが、しかし、このとき「パリのアメリカ人」はまだ30代にはいっていません。あらためて勉強をしたいとおもいはかならずしも嘘偽りではなかったようにおもえます。アメリカに戻ったガーシュイン、翌年には〈パリのアメリカ人〉を作曲・初演します。

すこしだけ補足しておく、〈ラブソディ・イン・ブルー〉が初演され、作曲家がパリの地に足を踏み入れるまでのあいだに、パリではジョセフィン・ベイカーが加わった「ルビュ・ネーグル」が爆発的な人気を博していました。ジャズとつながる音楽やダンスが、パリに大きな波として訪れる第二期が、1920年代です。

ラヴェルがジャズ的なイディオムを作品にとりいれるのは、オペラ〈子どもと魔法〉（1925）、ヴァイオリンとピア



ラヴェル（中央）とガーシュイン（右端）。ラヴェルのために開かれたパーティにて

ノのための〈ソナタ〉（1927）、そして2曲のピアノ協奏曲（1930～31）です。〈ソナタ〉の第2楽章が“ブルース”とつけられているのも、ジャズとじかに接しなかったドビュッシーとの違いをみることができるかもしれません。

寛容のパリ、音楽で

ガーシュインは1937年、40歳にならずして亡くなってしまいます。短い人生のあいだにもジャズやクラシックのみならず、ユダヤ系の音楽やアメリカ合衆国と隣接するキューバの音楽にも関心を寄せ、好奇心を失うことがありませんでした。人は、他者と、他者の音楽と出会うことでみずからの音楽、音楽のことばを変えてゆきます。パリは戦前も戦後も、アメリカで差別されたり、高い評価を得られなかったジャズ・ミュージシャンを受け入れ、また自分たちの音楽も豊かにしてきました。音楽的な包容力は現在も変わらずに生きています。21世紀になっていささかその寛容さに危機が訪れているようにみえなくもありませんけれど、その危機感を抱きつつも、パリの音楽を全体としてみていきたいと考える人はけっして少なくないはずで

（こぬま じゅんいち・
音楽、文芸批評家／早稲田大学教授）

心に残るクラシック

加藤一二三 ―④― 〈最終回〉

Hifumi Kato

人間存在の証し

J. S. バッハ：マタイ受難曲



©読売新聞社

昨年6月に現役を引退した後、生活のリズムは変わりました。公式戦の対局こそなくなりましたが、そのかわりにテレビ出演やカルチャーセンターでの講演、詰将棋の本作りなどいろんな仕事が増えて結構忙しい毎日です。将棋の研究もこれまで通り続けています。

私にとって一番面白いことは、今でも将棋の研究です。「良い将棋を指したい!」という気持ちは常にある。それは、優れた芸術に接した時の感動に近いものです。たとえば、ラファエロやフラ・アンジェリコの名画に接すると、なぜか良い将棋を指したくなるのです。芸術は娯楽ではありません。だから、同じ作品から何度も繰り返し深い感銘を受けることができます。

音楽は将棋と共通点が多いように思えます。次々に新しい展開が起こり、その都度、未知の状況が生まれる。徐々に緊張感が高まっていき、それがある時点で解き放たれ、たかぶった気

分をリラックスさせます。

精神の高揚と解放を求めて私が繰り返し聴く曲に、ヨハン・セバスチャン・バッハの〈マタイ受難曲〉があります。イエスの受難を描いた劇的な物語は、はじまりからしてすでに感動的ですが、とりわけ十字架の道行きを前に群衆から暴行を受けるイエスを描く場面(第54曲のコラール“おお、血と傷にまみれし御頭”)は、本当に心を揺さぶられます。〈マタイ受難曲〉はドイツ語ですが、私はカトリックの聖歌集(第171番)でこの場면을歌っています。

いばらの冠 おしかぶされ
厳しきむちに はだは裂かれ
血潮ながるる 主のみすがた
痛ましきさま 誰のためぞ

イエスの苦難が心の中に染みこむように入ってきます。これほど聴く者を敬虔な気持ちにさせる音楽があるでしょうか。

この曲を知ったのは、ある時に哲学

者のニーチェが〈マタイ受難曲〉を歓喜して聴いたとの新聞記事を読んだのがきっかけでした。あの「神は死んだ」と宣言したニーチェが感動したというのだから、ただごとではない。ぜひ聴かねばと思い、ヘルベルト・フォン・カラヤンがベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮したレコードを買ったのです。それ以来、この長大な音楽をおりに触れてレコードやCDで聴き返してきました。

〈マタイ受難曲〉には名演がたくさんあります。ブルーノ・ワルターがニューヨーク・フィルハーモニックを指揮した未完の録音は、本当にスケールが大きく、特に合唱がすばらしい。それから、ゲオルク・ショルティがシカゴ交響楽団を指揮した録音では、ソプラノのキリ・テ・カナワが歌うアリア(第49曲の“愛ゆえに我が救い主は死に給う”)に心を奪われました。まるで天上の人が歌っているかのようです。

バッハはほかにも好きな曲があります。〈ミサ曲短調〉や〈シャコンヌ〉(無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番の終曲)、たくさんある「前奏曲とフーガ」……。〈シャコンヌ〉はブゾーニ編曲のピアノ版をアルトゥール・ルービンシュタインが弾いた録音です。風格があり、壮大なドラマを見るようです。

モーツァルトの〈レクイエム〉も大好きな曲ですが、モーツァルトとバッハで

は同じ宗教曲でもどこか違います。モーツァルトの〈レクイエム〉は天才の産物



磔刑(画:ジョット、スクロヴェーニ礼拝堂のフレスコ画、1305年頃)

で、ひとことで言えば純粹。ああ、きれいだと思うのですが、心に染みこむようには入ってこない。一方、〈マタイ受難曲〉はもっと叙情的で、宗教的な悟りの境地を体現しているながら躍動感がみなぎっているように感じられます。

なぜ、バッハの音楽はこれほどまでに心を打つのでしょうか。そう言うと、バッハが大好きな妻はいつも「だからバッハはすごいって、昔から言っているでしょう」と言うのです。きっと理屈ではないんでしょうね。

〈シャコンヌ〉には、生死を超えた悟りの境地、彼岸に向けて進んでいくようなところがあります。言葉ではうまく言えないのですが、この世を離れていく時に、神が創り給うた人間というもののすばらしさにあらためて感じる、みたいな。

バッハの音楽は「人間存在の証し」ということになるのでしょうか。このような偉大な芸術をこの世に送り出してくれた神に感謝するほかありません。

(聞き手・事務局)

◆次号からはヤマザキマリさんです。

◎チェロ奏者

木村隆哉

Takaya Kimura

音楽は自由 ジャンルを超えて楽しめます

《7月はジャズ・ピアニストの小曽根真さんを迎えて、ガーシュインの〈ラプソディ・イン・ブルー〉などを披露します。小曽根さんとは親交がありますよね》

中学生の時から、ジャズの自由な感じが大好きで、小曽根さんの曲をよくウォークマンで聴いていました。何度か共演する機会があって、もう20年前になりますが、約1か月の全国ツアーをご一緒したこともあります。突然アドリブをやるなど、面白かったですね。音楽は自由で、ジャンルを超えて聴くことも弾くこともとにかく楽しむことを学びました。小曽根さんの音はとてもきれいで、彼にしかできない、世界を変えていく空気感がある。それをぜひ楽しんでいただきたいと思います。

《1970年東京生まれ。桐朋学園女子高校音楽科(共学)、同大学音楽学部卒業及び研究科修了。第2回宝塚ベガコンクール室内楽部門第1位。94年に読響に入団しました》

父がテノール歌手で学校の音楽教諭、母がピアノ教室を開いていたこともあって、クラシックやオペラ、ジャズ、カンツォーネなどの音楽が常に家で流れていました。3歳からピアノを始めましたが、朝課題ができないと幼稚園に行かせてもらえないなど厳しかったですね。チェロとの出会いは、8歳の時。安田謙一郎先生のリサイタルに父と行って、「かっこいいので、チェロをやりたい」と自分で言い出したらしいのです。

それから大学まで数人の先生に師事。特に印象に残っているのは、安田先生と元読響ソロ・チェロ奏者の毛利伯郎先生はくろうでしょうか。安田先生は憧れだったので、中1の時に直接電話してレッスンをお願いしました。天才肌の「神がかった」先生で、初日に「ラ」のピアノの音を出して、「音がいくつ聞こえるか」と問われました。しかし、2時間半続けても一つしか聞こえませんでした。「12個聞こえたら、来なさい」と言われ、レッスンを受けたかったので翌日にとりあえず「聞こえました」と返事をして(笑)、レッスンの許可がおりました。これはつまり、倍音(=基本となる音の周波数の倍の周波数を持つ音)も聞こえる耳になってから来



なさい、ということでした。もちろん、今はちゃんと12個聞こえますよ。毛利先生には高校から習い始め、高3の時から読響にエキストラとしてたびたび呼んでいただきました。卒業後は留学も考えましたが、毛利先生と一緒に演奏でき、何より読響が好きだったので、入団を決めました。

《ジャズのソロ・ライブなど、クラシック以外の音楽活動も行っていますね》

数年前から年に1回、ソロ・ライブをやっています。ジャズやシャンソン、ロック、ボサノバ、クラシックアレンジなど、好きな曲、やりたい曲を、ピアノやギター、ベース、ドラムと一緒に演奏しています。オーケストラの世界の外で、ライブを通していろんな

人と知り合えるのも楽しいですね。また、レコーディングにも積極的に取り組んでいます。当日楽譜を渡されて即本番の世界なので緊張しますが、いろんな音が出てモチベーションアップにもなっています。CMや映画など、皆さんの耳にもよく届いていると思います。

《大の車好きと聞きました》

パーソナルなスペースがあり、好きな所に行けるのがいいですね。色々な車に乗りたいので定期的に買い換えてこれまでに約60台、今はBMWやミニクーパーなど4台に乗っています。数年前に、レコーディングの同僚に誘われて、イタリア車のアルファロメオのレースに出場。デビュー戦の関東大会でいきなり優勝できたことで味をしめ、それから全国大会に連続出場し、去年は2位でした。チームプレイで、人とのかけひきや付き合いなど、意外とオーケストラに似ていると感じます。愛車に「読響」のステッカーを貼っていて、レースの仲間数人には読響の定期会員にもなっていたいたんですよ。



U pcoming concert schedule

今後の公演案内

名匠・大友直人が〈未完成〉〈運命〉〈新世界〉を一挙披露！

8/18 (土) 14:00 読響サマーフェスティバル2018《三大交響曲》
東京芸術劇場コンサートホール

シューベルト：交響曲 第7番〈未完成〉
ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉
ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉
指揮：大友直人



大友直人

「情熱大陸」で話題を呼んだ反田恭平ら若手ソリスト3人が登場

8/21 (火) 18:30 読響サマーフェスティバル2018《三大協奏曲》
東京芸術劇場コンサートホール

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲
ドヴォルザーク：チェロ協奏曲
チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番
指揮：大井剛史
ヴァイオリン：岡本誠司
チェロ：ラウラ・ファン・デル・ヘイデン
ピアノ：反田恭平



大井剛史



岡本誠司



ラウラ・ファン・デル・ヘイデン



反田恭平

欧州で活躍するストルゴーズが指揮する傑作〈新世界〉

8/25 (土) 14:00 第209回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

8/26 (日) 14:00 第209回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

シベリウス：交響詩〈フィンランディア〉、ヴァイオリン協奏曲
ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉
指揮：ヨーン・ストルゴーズ ヴァイオリン：シモーネ・ラムスマ



ヨーン・ストルゴーズ

フィンランドの名匠と日本を代表するピアニストが注目の共演

8/30 (木) 19:00 第614回 名曲シリーズ
サントリーホール

9/1 (土) 15:00 第11回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

アレサンドレスク：秋の黄昏時 ショパン：ピアノ協奏曲 第1番
シベリウス：交響曲 第2番
指揮：ヨーン・ストルゴーズ ピアノ：小山実稚恵



小山実稚恵

8月～9月1日 公演の聴きどころ

8月は、毎回チケットが完売する夏の人気企画サマーフェスティバル《三大交響曲》と《三大協奏曲》を開催する。18日の《三大交響曲》は、オーケストラ音楽の醍醐味を知り尽くした名匠・大友直人が、〈未完成〉〈運命〉〈新世界から〉の3曲を一挙に演奏する。円熟味を深めた大友のタクトが、傑作交響曲で深い感動へと導くだろう。

21日の《三大協奏曲》では、世界が注目する新進気鋭のソリスト3人が共演する。メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲では、バツハ国際コンクールで優勝しベルリンで研鑽を積む実力派・岡本誠司が流麗なソロを奏でる。ドヴォルザークのチェロ協奏曲では、フィルハーモニア管やBBCフィルなどと共演し、欧州で注目を浴びる新星ラウラ・ファン・デル・ヘイデンが登場。チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番では、圧倒的なカリスマ性で一躍人気ピアニストとなり、「情熱大陸」等メディアでも多数取り上げられるなど活躍の場を広げる反田恭平が、類いまれな音楽性で聴衆を魅了する。国内の主要オーケストラで活躍する大井剛史の指揮のもと、3人のフレッシュで熱い演奏にご注目を。

25日、26日の《マチネーシリーズ》は、フィンランド出身でヘルシンキ・フィル首席指揮者などを経験した実力派ストルゴーズが、お国物のシベリウス作品とドヴォルザーク〈新世界から〉を披露する。ヴァイオリン協奏曲では、オランダの名花ラムスマが約1年半ぶりに読響に登場し、シベリウスを力強く聴かせる。

30日の《名曲》、9月1日の《パルテノン名曲》は、《マチネーシリーズ》に引き続きストルゴーズが得意のシベリウス作品から、親しみやすく最も人気の高い交響曲第2番で本領を発揮する。北欧の雄大な自然を思わせる世界を作り上げるだろう。前半は、日本屈指のピアニスト小山実稚恵が、人気のショパンの協奏曲第1番で深みを増した境地を見せる。

(文責：事務局)

1回券料金表

定期・名曲・みなとみらい	S ¥7,500	A ¥6,500	B ¥5,500	C ¥4,000
定期 (10/26公演)	S ¥9,500	A ¥7,500	B ¥6,000	C ¥4,500
マチネー・サマーフェスティバル	S ¥7,500	A ¥5,500	B ¥4,500	C ¥4,000
パルテノン名曲	一般 ¥4,800			
大阪定期	BOX ¥8,500	S ¥6,100	A ¥5,100	B ¥4,100
福岡公演	S ¥6,100	A ¥5,100	B ¥4,000	

新鋭バ스티アンのタクトが生む華麗なる〈ボレロ〉

9/5 (水) 19:00 第21回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール (大阪)

9/6 (木) 19:00 名曲シリーズ 福岡公演
アクロス福岡シンフォニーホール

ベルリオーズ：序曲〈ローマの謝肉祭〉

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲

ドビュッシー：交響詩〈海〉 ラヴェル：ボレロ

指揮：ジョセフ・バスティアン ヴァイオリン：神尾真由子



ジョセフ・バスティアン

“色彩の魔術師”カンブルランの《チャイコフスキー名曲選》

9/15 (土) 14:00 第210回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

9/16 (日) 14:00 第210回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

チャイコフスキー：幻想序曲〈テンペスト〉、

ロココ風の主題による変奏曲、交響曲 第4番

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者) チェロ：アンドレイ・イオニーツァ



シルヴァン・カンブルラン

カンブルランが鮮やかに描くブルックナー〈ロマンティック〉

9/21 (金) 19:00 第615回 名曲シリーズ
サントリーホール

9/23 (日祝) 14:00 第106回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

モーツァルト：歌劇〈後宮からの誘拐〉序曲、ピアノ協奏曲 第24番

ブルックナー：交響曲 第4番〈ロマンティック〉(1888年版/2004年コーストヴェット第3稿)

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者) ピアノ：ピョートル・アンデルシェフスキ



ピョートル・アンデルシェフスキ

音楽の力とは？ カンブルランが届ける未来への熱いメッセージ

9/28 (金) 19:00 第581回 定期演奏会
サントリーホール

ペンデレツキ：広島に捧げる哀歌

シマノフスキー：ヴァイオリン協奏曲 第1番

ハース：静物 ラヴェル：ラ・ヴァルス

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者) ヴァイオリン：諏訪内晶子



諏訪内晶子

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター
(10:00~18:00/年中無休) 0570-00-4390
ホームページ・アドレス <http://yomikyo.or.jp/>

古楽界の鬼才アントニーニが初登場。女王ムローヴァが共演！

10/16 (火) 19:00 第616回 名曲シリーズ
サントリーホール

ハイドン：歌劇〈無人島〉序曲

ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲

ベートーヴェン：交響曲 第2番

指揮：ジョヴァンニ・アントニーニ ヴァイオリン：ヴィクトリア・ムローヴァ



ヴィクトリア・ムローヴァ

アントニーニが自らリコーダーも披露し、名人アヴィタルが魅せる

10/20 (土) 14:00 第211回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

10/21 (日) 14:00 第211回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ヴィヴァルディ：ドレスデンの楽団のための協奏曲

ヴィヴァルディ：マンドリン協奏曲

J. S. バッハ：マンドリン協奏曲

ヴィヴァルディ：リコーダー協奏曲

ハイドン：交響曲 第100番〈軍隊〉

指揮&リコーダー：ジョヴァンニ・アントニーニ

マンドリン：アヴィ・アヴィタル



ジョヴァンニ・アントニーニ



アヴィ・アヴィタル

日下紗矢子ら読響メンバーが繰り広げる白熱のアンサンブル

10/22 (月) 19:30 第19回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00開演 解説

《日下紗矢子リーダーによる室内合奏団》

J. S. バッハ：ブランデンブルク協奏曲 第5番

バルトーク：弦楽のためのデヴィエルティメントほか

ヴァイオリン：日下紗矢子 (読響特別客演コンサートマスター) チェンバロ：北谷直樹



日下紗矢子

鈴木雅明&世界最高峰のRIAS室内合唱団による極上の響き

10/26 (金) 19:00 第582回 定期演奏会
サントリーホール

J. M. クラウス：教会のためのシンフォニア

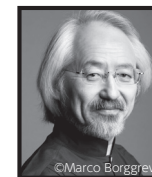
モーツァルト：交響曲 第39番

メンデルスゾーン：オラトリオ〈キリスト〉

メンデルスゾーン：詩篇第42番〈鹿が谷の水を慕うように〉

指揮：鈴木雅明 ソプラノ：リディア・トイシャー

テノール：櫻田 亮 合唱：RIAS室内合唱団



鈴木雅明

東京二期会オペラ劇場 歌劇〈魔弾の射手〉

■ 7/18 (水) 18:30、7/19 (木) 14:00、7/21 (土) 14:00、
7/22 (日) 14:00 東京文化会館 大ホール

指揮：アレホ・ペレス 演出：ペーター・コンヴィチュニー

出演：大沼徹、米谷毅彦、嘉目真木子、富平安希子、
清水宏樹、片寄純也 ほか (18、21日)

藪内俊弥、伊藤純、北村さおり、熊田アルベルト彩乃、
加藤宏隆、小貫岩夫 ほか (19、22日)

ウェーバー：歌劇〈魔弾の射手〉(原語歌唱・日本語台詞上演／日本語・英語字幕付き)

[料金] S ¥15,000 A ¥13,000 B ¥10,000 C ¥8,000 D ¥6,000 学生 ¥2,000
(18、21、22日)

S ¥13,500 A ¥12,000 B ¥10,000 C ¥8,000 D ¥6,000 学生 ¥2,000
(19日・平日マチネ特別料金)

[お問い合わせ] 二期会チケットセンター 03-3796-1831

フェスタサマーミュージア KAWASAKI 2018

読売日本交響楽団 シネマ&ポップス

■ 8/1 (水) 15:00 ミューザ川崎シンフォニーホール

指揮：渡辺俊幸 歌：森山良子

〈ディズニー・ファンタジー〉序曲

映画〈スターウォーズ〉～レイア姫のテーマ、ダース・ベイダーのテーマ ほか

《森山良子の世界》

涙そうそう、家族写真、エターナリー、虹の彼方に ほか

《渡辺俊幸の世界》

森と大地への讃歌、NHK テレビドラマ「大地の子」～メインテーマ

[料金] S ¥5,000 A ¥4,000 B ¥3,000

[お問い合わせ] ミューザ川崎シンフォニーホール 044-520-0200

熊谷文化創造館さくらめいと開館20周年記念

サマースペシャル2018 三大交響曲

■ 8/19 (日) 15:00 熊谷文化創造館さくらめいと「太陽のホール」

指揮：大友直人

シューベルト：交響曲 第7番〈未完成〉

ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉

ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉

[料金] S ¥6,000 A ¥5,000 B ¥4,000 25歳以下 ¥2,000

[お問い合わせ] さくらめいとチケットセンター 048-532-9090 (火曜日を除く)